

第 1 2 話 仁徳天皇の御仁慈

人々の貧苦を哀れに思われて、長く租税を免除され、極端に質素な生活をなされた。

第 16 代仁徳天皇は応神天皇の御子で、お名を大鷦鷯尊と申し上げる。はじめ弟の菟道稚郎子が父天皇のおぼしめしで皇太子にお立ちになっていたのですが、稚郎子は王仁を師として学ばれて、兄を上とする儒教の学問が進むと共に、弟の身として兄を超えることを心苦しくお考えになられたので、父応神天皇のお崩れになった後に、御位を兄の尊に譲られて自分のご即位になりませんでした。

兄弟で御位を譲り合う

ところが、兄の大鷦鷯尊はいかに弟の太子の頼みであっても、弟の即位は父天皇の仰せで一旦お定めになったことですから、それを破る訳にはいかないと仰せられて、やはりご即位にならなかった。

こうしてお互いに固く譲り合って、稚郎子は宇治に、大鷦鷯尊は難波（大阪府）におられたままで、3 年に及んだ。ついには国々の貢物もいづれの宮に奉ってよいか分らないようになり、人々も困りはじめました。

稚郎子は逆もこのままでは兄の尊の御心を動かすことの出来ないかと分ると、ついに御自分でお命を縮められて、俄かにお薨れになりました。なんとという悲しむべきことであつたでしょう。

兄の大鷦鷯尊はそれを聞かれると大いに驚かれて、難波から宇治の宮にかけつけて太子の御遺骸にとりついてお歎きになりましたが、今はどうしようもなかったので、厚く御遺骸を宇治の山の上に葬り、難波にお還りになり、はじめて御位にお即きになって、難波の高津宮を皇居とされた。

質素な御殿

昔は天皇が新たにお立ちになる毎に、皇居をおかえになるのが普通でしたから、これまでも都は方々にかわりましたが、大抵は大和の内であそこここと遷っただけでした。

それを今度、仁徳天皇は珍しくも摂津に都をお遷しになったのです。これは多分、三韓との行き来が多くなったために、船着きの便のよい土地をお選びになったのであろうといひます。

しかし、その御殿は極めて質素で、取りまわした垣は勿論、お住いの御殿までも、全く荒壁のままで上塗がしてなく、柱や天井などは何の飾りも無ければ、屋根の茅も葺きっぱなしで、切って揃えてすらありません。それもこれも少しでも民の負担を軽くしてやろうとおぼしめしてのことでした。

実に、天皇は、学問のお出来になった弟の稚郎子がお命を捨ててお譲りになっただけあって、御賢明で、お情け深く、常に民をあわれまれたお方であります。

民をめぐみ給う

ご即位四年の春の二月、天皇は群臣に仰せられました。「朕が高いところにのぼって四方を見るのに、煙がどの村にも立たない。思うに、五穀が実らないので、民が貧しくて、炊ぐ物が無いのである

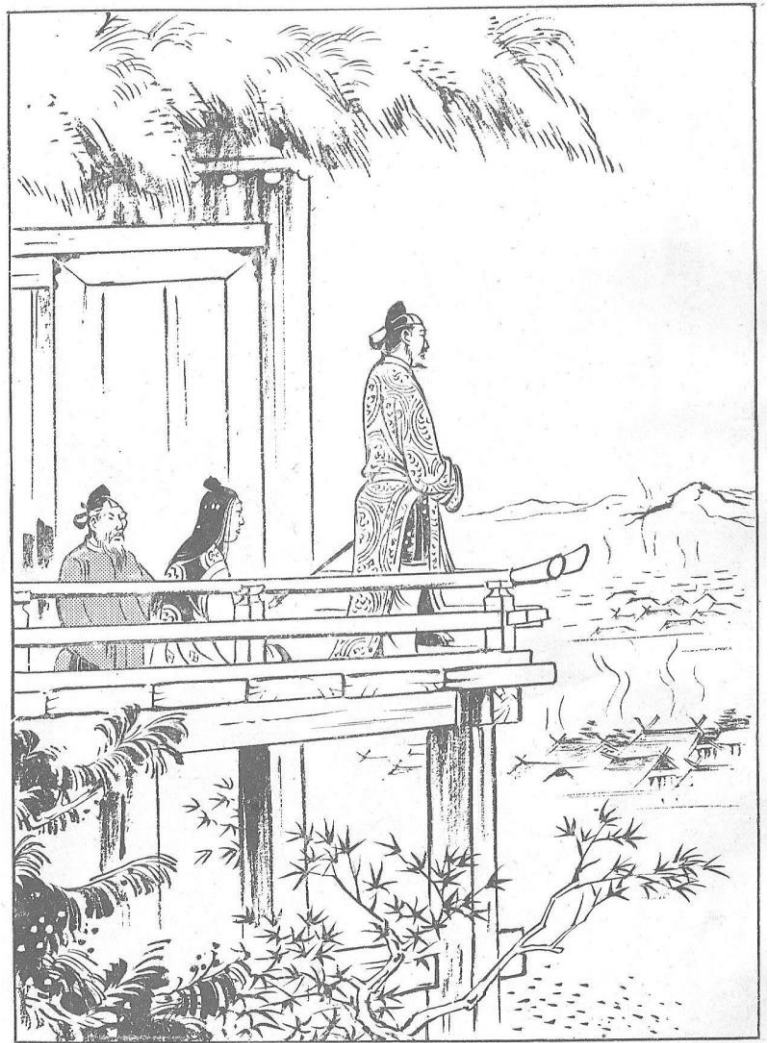
第12話 仁徳天皇の御仁慈

う。都に近いところでさえこんなであるとすれば、遠い国々はなおさらであろう」と。

天皇は民のこの有様を非常に哀れにおぼしめして、せめては税だけでも免してやろうと、三月になると更に勅を下して、今から後三年の間は、一切の調や課役を止めて、民の苦しみを息めてやれと仰せ出だされた。

ここに課役というのは、昔、まだお金などのなかった時代に、人々が働いて得た品物を調として納める外に、一年のうちに幾日かを労力を以ってお上の仕事をつとめることですから、やはり今日の租税・税金に当ります。

これを三年の間、全くお取りにもならなければお使いにもならないことになされたのですから、その日からお始めになった天皇の御儉約は申すも畏いほどでありました。



仁徳天皇に遠く民家の炊煙を望む

日常お召しになる御衣も、お履も、破れきらなければ新たにはお作りにならず、ご飯も、お汁も、饅頭も腐らなければおかえにならず、何事も約めて、ただ民の生活の豊かになることにのみ御心を注がれた。勿論、御殿の垣は崩れてもお造りにならず、屋根の茅は腐り抜けてもお葺きにならないので、風雨は隙間から吹き入って御衣やお褥を濡らし、星は屋根の破れた間から漏れて、夜のお床をすら顛わに照らしました。ああ、遠い田舎の貧しい伏屋にしても、よもやこれ以上ではあるまいと思われるほどでした。

民の富めるは朕の富

幸いに、その後は豊年が続いて、五穀もよく実ったので、三年の間に人々は皆富んで、天皇の御仁慈を称える声が到る処に起こり、煙も村々に盛んに立ちのぼるようになりました。

夏の四月の或る日、天皇は高いところに登って遠くを御覧になると、三年前と違って到る処に煙が盛んに立っています。天皇のお喜びはいかほどであったでしょう！ 其の日、皇后に、「朕はもう富んだ。何も心配することはない」と仰せられた。皇后は不審に思われて、「何を富んだとお仰せられるのでございますか？」とお訊きになると、「煙が国に満ちている。民が富んだのであろう」と仰せられた。

皇后が重ねて「垣が壊れても繕うことが出来ませんし、御殿は破れても、御衣も、お褥も、露に湿るではありませんか。何で富んだとお仰せられるのでございますか？」とお訊きになると、天皇は、「君は

第12話 仁徳天皇の御仁慈

民を以って本としなければならぬ、だから、古の聖の君は、一人でも凍える者があれば、顧みて自分の身を責めた。今、民の貧しいのは、即ち朕が貧しいのだ。民の富んだのは、即ち朕が富んだのだ。民が富んで君の貧しいことはないのである」と仰せられた。

この時に天皇の御心をお察して、後の人が詠んだ歌に、
高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどは賑わいにけり
というのがありますが、実際、煙が盛んに立っているのをご覧になった時には、さぞ天皇もご満足と覚えになった事でありましたでしょう。

仁徳天皇の御仁政のおかげで豊かになった人々は、既に一切の課役を免除になってから三年経ったために、御殿は朽ち壊れ、倉庫は全く空になってしまったのを見て、今は一日も早く調を納め、御殿の修繕をさせて頂きたいと願って出ましたが、天皇は今少し、今少しと仰せられて、なお三年の間お許しになりませんでした。

人々のまごころ

六年目の十月、御殿の中はいよいよ破れて全く雨露を凌ぐことも出来なくなり、仕えている臣下達の衣も破れて、装いも整わないようになったので、今はとて初めて調や課役を科して、御殿をお造らせになりました。待ち構えていた人々は大喜びで、老いも幼きも我先きにと勇んで馳せ集まって、夜を日に継いで工事を励んだので、忽ちのうちに皇居は立派に出来上がりました。

働く人々の心もどんなにか楽しければ、それをご覧になる天皇の御心もさぞ楽しいことであっただろうと想像されるではありませんか。

御聖徳

天皇はまた、進んで民の為をお計りになって、低くてじめじめした土地が遠く広がっている処などは、池を掘り、溝を作って、水利をよくし、或いは堤防を築いて洪水の害を除いたりして、多くの田や畑を開かれました。また、道路を造り、橋を架けて、交通の便を開かれたところもずいぶんありました。

全て天皇のお政治は、人々を安らかにすることを根本となされたので、世の中は永く泰平無事に治まりました。殊に御代の末頃の二十余年は、一人の罪人も出なかったというのを見ても、いかに立派な御代であったかが分ります。大鷦鷯尊は、後に、仁徳天皇と諡されたのもこの為でありました。

(第12話 仁徳天皇の御仁慈 終わり。 次は前頁に戻り、13話 任那の滅亡へ)